



Title	ゴート語の保守的特徴と他のゲルマン語との類似点
Author(s)	高橋, 輝和
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1977, 17, p.165-175
Issue Date	1977
URL	http://hdl.handle.net/10069/9668
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-20T22:36:27Z

ゴート語の保守的特徴と他のゲルマン語との類似点

高 橋 輝 和

Zu den Archaismen des Gotischen und Ähnlichkeiten zwischen ihm und anderen germanischen Sprachen

Terukazu TAKAHASHI

I. ゴート語の保守的特徴

オーストリアで出土した紀元前後のカプトの銘と北欧や北ドイツで発見された二三世紀の少数の短いルーネ文字刻文を別にすれば、四世紀の中頃に訳されたゴート語の聖書並びにその他のゴート語の文書は、五世紀末か六世紀の写本として残っているとはいえ、ゲルマン語最古のまともな文献である。そしてこのゴート語の文献の中には、他のゲルマン語¹⁾の最古の文献（古高ドイツ語と古英語では八世紀、古サクソン語では九世紀、古アイスランド語では十二世紀）にもはや十分には見出すことのできない次のようないくつかのゲルマン基語時代の古風な特徴がそのまま保たれている。

1. 音 韻 的 特 徴

a. ウムラウト（変母音）の未発生

ゴート語には、ゲルマン基語時代のウムラウトは別にして、i ウムラウトも a ウムラウトも u ウムラウトも生じていない（古い時代のルーネ文字刻文にもウムラウトはまだ見られない）。

ゴ harjis; 古ア herr, 古英 here, 古高ド heri「軍隊」（i ウムラウト）

ゴ gulþ; 古ア goll, 古英 gold, 古高ド gold「金」（a ウムラウト）

ゴ handum; 古ア hōndum「両手に」 }
ゴ silubr; 古英 siolufur「銀」 } (u ウムラウト)

b. r 音化の未発生

[z] は他のゲルマン語では [r] に変る（ただし古い時代のルーネ文字刻文も z を示してい

る)。

ゴ maiza ; 古ア meiri, 古英 m̄ara, 古高ド m̄ero 「より大きい」

c. 二重子音化の未発生

北海域ゲルマン語や内陸ゲルマン語では子音は特に j の前で二重音化される。北欧ゲルマン語では k と g が時に二重音化される。

ゴ lagjan ; 古ア leggja, 古英 lecgan, 古高ド leggen / lecken 「横にする」

d. 単音 h, q の保持

ゴート語の単音 h [h̥], q [k̥] (唇を丸めて発音する h 音, k 音) に対して他のゲルマン語では複合音 hw, hv (これらからさらに h または w に) や kw, cw, qu (これらからさらに k) に変る。

ゴ hva ; 古ア hvat, 古英 hwæt, 古高ド hwa3 「何」

ゴ qinō ; 古ア cona, 古英 cwene, 古高ド quena 「女, 妻」

e. 複合子音 hsw, hsj の保持

ゴ taihswa ; 古高ド zeswa 「右手」

ゴ bi-niuhsjan 「うかがう」; 古ア n̄ysa, 古英 n̄eosian, 古高ド niusen 「試る」

f. mr の保持

他のゲルマン語では間に b が入る。ただしゴート語にもこの傾向がすでに現われている。

ゴ timrjan (まれに timbrjan) ; 古ア timbra, 古英 timbran, 古高ド zimbarōn 「建てる」

2. 形態的特徴

a. 単語の長形の保持

ゲルマン語では普通単語の第一音節に強勢が置かれるため、単語の終わりの方は自然と弱く発音される。従って時代の経過と共に語尾が退化して語形が次第に短くなる傾向があるが、ゴート語ではまだ古い長い語形がよく保持されている。

ゴ þamma, 古高ド demu, 新高ド dem (定冠詞の男性・単数・与格形)

ゴ habaidēdum, 古高ド habētum, 新高ド hatten 「(我々が)持っていた」

b. 名詞の単数・主格形語尾 -s, 複数・対格形語尾 -ns の保持

この -s, -ns はゲルマン基語の -z, -nz から変化したものであるが、-z, -nz 自体は印欧(インド・ヨーロッパ)基語の -s, -ns に由来するので、結果的には昔に戻ったことになる。

ゴ *dags*; 古ア *dagr*, 古英 *dæg*, 古高ド *tag* 「日が」

ゴ *dagans*; 古ア *daga*, 古英 *dægas*, 古高ド *taga* 「日々を」

c. 名詞の呼格形の保持

他のゲルマン語では呼格形は主格形と同じになったが、ゴート語ではまだ一部の名詞で区別されている。

ゴ *dag*; 古ア *dagr*, 古英 *dæg*, 古高ド *tag* 「日よ」

d. 動詞の両数形の保持

他のゲルマン語は両数形を持っていないので、代りに複数形を用いる。しかしゴート語にも三人称の両数形はもはや存在しない、

ゴ *ainzu ik jah Barnabas ni habōs waldufni du ni waurkjan?* 「私とバルナバスの二人だけは働かないための権利を持っていないのですか」 1 コリ 9, 6

e. 総合的受動形の保持

他のゲルマン語には動詞の単独形による受動表現は化石的にしか残っておらず、受動はその代りに再帰動詞または助動詞+過去分詞によって分析的に表現される。ただしゴート語でも過去形の場合は分析的な手段が取られる。

ゴ *all dalei usfulljada jah all fairgunjē jah hlainē gahnaiwjada* 「凡ての谷はうずめられ、凡ての山と丘は低くされてしまう」 ルカ 3,5

f. 重複過去形の保持

他のゲルマン語にも化石的に残ってはいるが、たいていは重複がくずれてしまっている。

ゴ *haihait* [hēhēt]; 古ア *hēt*, 古英 *hēt*, 古高ド *hiaz* 「(私、彼が) 呼んだ」

g. 命令法・三人称形の保持

他のゲルマン語は三人称に対する命令には叙想法形(接続法形あるいは願望法形とも呼ばれる)を用いる。しかしゴートでは命令法形と叙想法形とは使い分けられる。

ゴ *sa piudans Israēlis atsteigadau nu af þamma galgin* 「イスラエルのその王は今その十字架から降りて来い」 マル 15,32

h. 疑問代名詞「だれ」の男性形と女性形の区別

他のゲルマン語では本来の男性形が男性と女性との両方に用いられる。

ゴ *huas* (男), *hū* (女); 古ア *hverr*, 古英 *hwā*, 古高ド *hwer/wer*

i. 弱変化第四類動詞の保持

他のゲルマン語には弱変化動詞の第四類は存在せず、対応する動詞は他の変化型に組み入れられている。

j. *wiljan* 「望む」の叙想法形の保持

ゴート語の *wiljan* の現在形では単複とも叙想法形だけが用いられ、叙実法形（直説法形）は用いられないが、他のゲルマン語では複数形には叙実法形が用いられる。

k. 事象観表示法の保持

印欧基語の動詞では時称の表示以上に、事象観（アスペクト）の表示が重要であった。これは特にスラブ語で後に極めてよく発達したが、ゴート語でもしばしば事象観の表示が問題になる（特に接頭辞 *ga-* による圧縮的、完了的事象観の表示）。

sēhūm sumana in þeinamma namin usdreibandan un hulþōns 「ある人があなたの名前で悪霊を追い出しているのを我々は見えていました」マル9,38（拡大的、未完了的事象観）

gasēhūm sumana ana þeinamma namin usdreibandan un hulþōns 「ある人があなたの名前で悪霊を追い出すのを我々は見ました」ルカ9,49（圧縮的、完了的事象観）

3. 語彙的特徴

a. ゴート語には、他のゲルマン語では全く用いられないか、またはただ化石的にしか残っていない印欧語起源の語が多く使われている。

an 「…か」、*aþn(s)* 「年」、*-ba* 「もし…でも」、*baups* 「つんぼの、おしの」、*bērusjōs* 「両親」（この語は本来 *bairan* 「産む」の能動完了分詞である：「産んだ人達」）、*af-dauips* 「悩まされている」、*digan* 「土をこねて作る」、*dulgs* 「負債」、*ei* 「…(する) ために」、*faian* 「責める」、*-faps* 「能力のある男」、*fitan* 「苦しんで産む」、*haihs* 「片目の」、*hlifan* 「盗む」、*ip* 「しかし」、*kaurus* 「重い」、*leisan* 「知っている」、*maidjan* 「交換する、変造する」、*maudjan* 「思い出させる」、*mimz* 「肉」、*niþan* 「援助する」、*qairu* 「とげ」、*qius* 「生きている」、*reiran* 「震える」、*rimis* 「平穩」、*ana-silan* 「黙る」、*sineigs* 「年老いた」、*-u* 「…かどうか」、*-uh* 「そして」、*bi-ūhts* 「慣れた」、*weihs* 「村」、*weitwōps* 「証人」（*weitan* 「見る」の能動完了分詞から）、*wilwan* 「奪う」、*wipōn* 「振る」

b. 同じ語形が他のゲルマン語で使われていても、ゴート語の方が本来の意味を保っている場合がある。

ゴ *asans* 「夏、収穫期」；古ア *ōnn* 「畑仕事」、古高ド *aran* 「収穫」

ゴ *baur* 「産まれた者」；古ア *burr*、古英 *byre* 「息子」

ゴ *fana* 「布ぎれ」；古ア *fani*, 古英 *fana*, 古高ド *fano* 「旗」

ゴ *haldan* 「家畜の番をする, 家畜を飼う」；古ア *halda*, 古英 *healdan*, 古高ド *haltan* 「保つ」

ゴ *kilpei* 「子宮」；古英 *cild* 「子供」

ゴ *maþl* 「集会場所」；古ア *māl* 「法律事件, 話し」, 古英 *mæþel* 「集会, 話し」, 古高ド *mahal* 「裁判(場)」

ゴ *ga-mōtan* 「場所を見い出す」；古英 *mōtan*, 古高ド *muozan* 「…してよい」

ゴ *uf* 「下で」；古ア *of*, 古高ド *ob(a)* 「上で」

ゴ *wikō* 「順番」；古ア *vika* 「週, 海里」, 古英 *wice*, 古高ド *wecha* 「週」

ゴ *wiþrus* 「子羊」；古ア *vedr*, 古英 *weder*, 古高ド *wider* 「雄羊」

II. ゴート語と他のゲルマン語との間の類似点

ゲルマン語内部での親縁関係を考察するために、ゴート語と他のゲルマン語群の各々との間の独占的な類似点を記述する。類似点として文法的なものや語彙的なものが挙げられるが、しかし語彙に関してはゴート語は他の三群のどのゲルマン語ともかなりの語を共有しており、また語彙は容易に借用されたり、さらに他のゲルマン語では偶然記録されなかったということが十分考えられるので、語彙の面から親縁関係を認定することは困難である。これに対して文法的な特徴は語彙よりも固定的であることが普通なので、文法上の類似点の指摘は親縁関係の確認に役立つと思われる。

ゴート語と北欧ゲルマン語との間の類似点

1. 音韻的類似点

a. ゲルマン基語の *ww* の強化

ゲルマン基語の *ww* はゴート語では *ggw* に北欧ゲルマン語では *ggv* に強化された。

ゴ *triggwana*, 古ア *tryggvan*；古英 *ge-trēowene*, 古高ド *gi-triuwan* 「忠実な(男を)」

五世紀頃の古ノルド語のルーネ文字刻文には強化されていない例があるので、北欧ゲルマン語における強化はゴート語よりも後に生じたことが考えられる²⁾。さらにゴート語のこの場合の *ggw* は [ggw] と考えられているが、しかしそうではなくて初めから [ngw] であった可能性もあるので、そうするとゴート語と北欧ゲルマン語との間には全く関係がないことになる。また *ww* の強化の例はわずかながらも他のゲルマン語にも見い出されるので、この強化はゴート語と

北欧ゲルマン語のみならず、他の全てのゲルマン語においても一度は生じたに違いないという説もある³⁾。

b. ゲルマン基語 *jj* の強化

ゴート語では *ddj* に、北欧ゲルマン語では *ggj* に強化されている。

ゴ *twaddjē*, 古ア *tveggja*; 古英 *twēg(e)a*, 古高ド *zweiio* 「二つの」

ゴート語の *ddj* と北欧ゲルマン語の *ggj* とのどちらが本来的で、どちらがさらに変化しているのかは不明である。しかし古ノルド語のルーネ文字刻文に強化されていない例があるので、*ww* の強化の場合と同じく、両者は全く無関係であるかもしれない。

c. 鼻音+喉音の後の *w* の保存

ゴ *siggwan* [*siŋgwan*], 古ア *syngva*; 古英 *singan*, 古高ド *singan* 「歌う」

d. 語中母音の未発生

他のゲルマン語で語中の子音 +*r*, *l*, *m*, *n* の間に母音が発生している。

ゴ *fugls*, 古ア *fugl*; 古英 *fugol*, 古高ド *fogal* 「鳥」

e. ゴート語と東部の北欧ゲルマン語とは開音節で長音の *o* を持つ。

ゴ *bauan* [*bɔ:an*], 古ス *bōa*; 古ア *būa*, 古英 *būan*, 古高ド *bū(w)an* 「住む」

2. 形態的類似点

a. 合成疑問代名詞の使用

ゴート語と北欧ゲルマン語は場所の疑問副詞+代名詞の合成形を「だれ」の意味の疑問代名詞として用いる。

ゴ *hvarjis*, 古ア *hverr* (古ノルド語の **hvarjiz* から)

b. 現在分詞の女性・単数形に接辞 *-in-* を使用

ゴ *bairandein* [*berandi:n*], 古ア *berandi* (古ノルド語の **berandin* から) 「運んでいる(女を)」

他のゲルマン語では普通の形容詞と同形で、しかも強弱両形で用いられる(ゴート語の現在分詞は弱変化である)

c. 強変化動詞の過去・単数・二人称形に語尾 *-t* を使用

ゴ *bart*, 古ア *bart*; 古英 *bāri*, 古高ド *bāri* 「(君が)運んだ」

-t は印欧基語の現在完了形に、-i は不定過去形に由来すると考えられている。なお -t は北海域ゲルマン語と内陸ゲルマン語においても完了現在動詞には現われる。

d. -nan 動詞の使用

この種の動詞は他のゲルマン語にも少しは存在するが、ゴート語と北欧ゲルマン語は「ある状態になる」という意味の動詞として多く用いる。

ゴ *ga-waknan*, 古ア *vakna* 「目ざめる」; 古英 *wæcnan* 「産まれる」

e. 最高級形容詞に強弱の両形使用

他のゲルマン語で強変化の最高級形の使用は極めてまれで、普通は弱変化形が用いられる。

f. 不変化不定詞の使用

他のゲルマン語では特に目的を表わす前置詞と共に用いられる不定詞は語尾変化をする。

3. 語彙的類似点

(ゴート語に対応するのは特記されていない限り古アイスランド語。ゴート語の単語に意味が示されていないければ、北欧ゲルマン語の方の意味と同じである)

airinōn, *arna* 「使いである」, *aljan*, ノル *elja* 「太らせる」, *ams* 「肩」, *äss* 「山の背」, *bagms*, 古ス *bagn* 「木」, *bandwjan*, *benda* 「しるしを与える」, *ga-batnan* 「得をする」, *batna* 「良くなる」, *daubiþa*, *deyfa* 「つんぼ」, *af-döbnan* 「黙る」, *dofna* 「力を失う」, *us-filma*, *felms-fullr* 「驚いた」, *fōn*, *funi* 「火」, *fötubaurd*, *fötborð* 「足台」, *fraiw*, *fræ* 「種」, *fulhsni* 「秘密」, *fylgsni* 「隠れ家」, *fullnan*, *fullna* 「一杯になる」, *garazna*, *granni* 「隣人」, *grêts*, *grätr* 「泣くこと」, *gudja*, *guði* 「司祭」, *hauri* 「石炭」, *炭火*, *hyrr* 「火」, *uf-hlöhjan*, *hlögja* 「笑わせる」, *hvarnei* 「どくろ」, *hvern* 「魚の頭の中の骨」, *kriustan*, 古ス *krýsta* 「はぎしりする」, *af-lifnan* 「余る」, *lifna* 「残っている」, *fra-lusnan* 「失われる」, *losna* 「ゆるむ」, *milhma*, 古ス *molin* 「雲」, *mundōn* 「注視する」, *munda* 「狙う」, *nidwa* 「さび」, *nid-fölr* 「さびで黄色い」, *qrammiþa* 「湿気」, *krammr* 「湿った」, *saggqs* 「日没」, 西, *sökk* 「日没」, *samakuns*, *samkynja* 「同族の」, *sauil*, *söl* 「太陽」, *sauþs* 「供物」, *sauðr* 「羊」, *seinagairns* 「利己的な」, *singjarn* 「欲ばりな」, *ga-paursnan*, *þorna* 「ひからびる」, *unqēniþs*, *ūkvændr* 「妻を持たない」, *wahstus*, *vøxtr* 「体格」, *wandus*, *vøndr* 「さお」, *watō*, *vatn* 「水」, *wratōn* 「行く」, *rata* 「うろつく」

ゴート人の居住地は南スウェーデンであったと一般には考えられているが、しかしこの考えに対して懐疑的な考古学者⁴⁾は、ゴート人の居住地をウィスラ川の下流域(今のポーランド)と考

え、スウェーデン南部のイエータランドやゴトランド島をゴート人の移住地と考えている。いずれにしても、しかしゴート語と北欧ゲルマン語との間にのみ見られる多くの文法上の類似点は、ゴート人と北欧ゲルマン人（の一部）との間の直接的な親縁関係を証明していると考えられる必要がある。

ゴート語と内陸ゲルマン語（古高ドイツ語）との間の類似点

1. 音韻的類似点

無声摩擦音 [f, θ, s] の前の鼻音はゴート語と古高ドイツ語では保たれているが、北海域ゲルマン語では前の母音を長音化して消失する。北欧ゲルマン語では消失する場合としない場合とがある（北欧ゲルマン語では上記以外の条件下でもしばしば鼻音が消失する）。

ゴ ansts, 古高ド anst; 古英 *ǣst*, 古ア *āst* 「好意」

しかし北海域ゲルマン語の中でも古フリジア語と古サクソン語では徹底していない。

2. 形態的類似点

a. 強変化形容詞の中性・単数の主格形と対格形に短形と長形の二つがある。他のゲルマン語には短形だけしかない。

ゴ *blind* / *blindata*, 古高ド *blint* / *blinta3* 「盲の」

古高ドイツ語にはさらに男性と女性の単数・主格形も二つある。

b. 弱変化第三類の過去形の接尾辞の前に e 長音が現われる。

ゴ *habaida* [*haβe:ða*], 古高ド *habēta*; 古ア *hafpa*, 古英 *hæfde* 「(私が) 持っていた」

3. 語彙的類似点

af-aikan 「否定する」, *in-eih(h)an* 「いい渡す」, *af-drausjan* 「投げ落す」, *trōran* 「したたらせる」, *dulps*, *dult* / *tult* 「祭り」, *faþa*, 中高ド *vade* 「囲い」, *fēra*, *fēra* / *fiara* 「部分」, *flautjan*, *flō33an* 「自慢する」, *framwairþis*, *framwort* 「さらに」, *gabei*, *kepi* 「富」, *gahlaiba*, *galeipo* 「同僚」, *galaufs* 「高価な」, *galaub* 「信頼できる」, *gaqiujan*, *gaquihhan* 「生かす」, *gawidan*, *giwetan* 「結びつける」, *gilstrs*, *gelstar* 「税金」, *haiti*, 中高ド *heize* 「命令」, *hōha*, *huohili* 「すき」, *hrainei*, (*h*)*reini* 「清浄」, *heilahvairbs* 「一時的な」, *hwiliwerbi* 「不安定」, *is*, *er* 「彼が」, *knōps*, *chnöt* 「種族」, *kunawida*, *chunwidi* 「かせ」, *rinnō* 「小川」, *rinna* 「とい」, *si*, *si* 「彼女が」, *stikls*, *stehhal* 「杯」, *unhrainþa*, *unhreinida* 「不浄」, *urruns* 「日の出」, *urruns* 「昇る太陽」, *waifairhjan*, *weverhen* 「嘆

く」

ゴート語と内陸ゲルマン語（古高ドイツ語）との間にある類似点は、ゴート語と北欧ゲルマン語との間にある類似点よりも少ないが、これはゴート人と後に古高ドイツ語を話す人々（特にバイエルン人とアレマン人）とが二世紀頃までバルト海岸で接触していたことから説明される。しかし古高ドイツ語とゴート語と古北欧ゲルマン語にのみ共通するいくつかの点を考慮して、バイエルン人やアレマン人とゴート人の起源を共にスカンディナビアに求める説⁵⁾に従えば、古高ドイツ語とゴート語との間の類似点の理解は容易になるかも知れない。

ゴート語と北海域ゲルマン語との間の類似点

この両者の間には重要な意味を持つ独占的な類似点は少ない。従ってほとんど直接的な関係はなかったと考えられる。

1. 音韻的類似点

ゲルマン基語の ē¹ [e:] と ē² [e:] とが融合している（ゴート語と古フリジア語）。

ゴ *lētan*, 古フ *lēta*; 古ア *lāta*, 古英 *lǣtan*, 古高ド *lāgan* 「…させる」(ē¹から)

ゴ *hēr*, 古フ *hēr* (しかし *hir* もある); 古ア *hēr*, 古英 *hēr*, 古高ド *hiar* (ē²から)

厳密に言えばゴート語と古フリジア語とでは結果が異なる。つまりゴート語では ē¹ と ē² との融合によって生じた ē は狭音 [e:] であって広音の ai [e:] と対立するが、古フリジア語にはこの対立はなく、e 長音は一つである。なお古英語の中のアングリア方言にも同様の融合が生じている。

2. 形態的類似点

-(u)mists に終る最高級形が保持されている。

ゴ *frumists*, 古英 *fyrmost*, 古フ *formest*; 古ア *fyrstr*, 古高ド *furisto* 「第一の」(ただし古英 *fyrest* もある)

3. 語彙的類似点

(特記されていない限りは古英語との対応を示す)

alhs, 古英 *ealh*, 古サ *alah* 「神殿」, *aljar* 「どこかで」, 古英 *ellor*, 古サ *ellior* 「どこかへ」, *andalauni*, *andlēan* 「報酬」, *aurtigards* 「庭園」, *ortgeard* 「果樹園」, *awistr*, *ēowestre* 「羊小屋」, *biwaibjan* 「まとわせる」, *bewāfan* 「巻きつける」, *drus*, *dryre* 「倒れること」, *friapwa*, *friod* 「愛」, *gaidw*, *gǣd* / *gād* 「不足」, *gaunōpus*, *gēanoa* 「嘆き」, *hauhairts*,

hēahheort「思い上がった」, hazjan, herian「ほめる」, hnasqus, hnesce「柔らかい」, af-hrisjan「振り落す」, hrissan「振る」, hunsl, hūsl「供物」, hūōpan「誇る」, hwōpan「おどす」, ibdalja「斜面」, ofdæle「下り坂」, iddja, ēode「(私, 彼が)行った」, ina, 古サ ina「彼を」, insahts, insiht「物語」, innakunds, innecund「身内の」, is, 古サ is「彼の」, lubains, lufen「希望」, mizdō, meord「報酬」, ga-raideins, rædan「指図」, in-rauhtjan「怒る」, rēoc「怒りたかった」, ga-sleipjan「害する」, slidan「傷つける」, ga-staldan「手に入れる」, stealdan「所有する」, þrūtsfill, þrūstfell「らい病」, ufarleipan, oferlidan「越えて行く」, unaiwisks「恥じるところのない」, unæwisc「恥を知る」, unbairands, unberende「実らない, 不妊の」, unbrūks, unbryce「無益な」, undaurnimats, undernmete「朝食」, ungakusans, ungecoren「不適格な」, unhveila, unhwilen「不断の」, unlēds, unlæd「貧しい, あわれな」, unwamms「汚れのない」, 古英 unwemme「無傷の」, 古サ unwam「汚れのない」, unwēniggo, unwēningu「思いがけずに」, af-walwjan「転がしてのける」, wielwan / wælwian「転がす」, wargiþa, wiergþu「罰」

注 記

1) ゲルマン諸語の分類にはいろいろと問題があるが, 紀元後六世紀には, 後の状況から推しても, 大体四つの集団にまとまっていたと考えられる。

1. 地中海域ゲルマン語

ゴート語

ヴァンダル語

ブルグンド語

ゲピード語

ルギ語等

これらの言葉の間に違いがなかったことをローマ人の記録が伝えている。

2. 北欧ゲルマン語

600年頃まではほぼ単一的な古ノルド語の時代である。七世紀以降東西への分化が目立ち始め, 1000年頃には個別化が決定的になる。

東 部

スウェーデン語

グトランド語

デンマーク語

西 部

ノルウェー語

アイスランド語

フェーロー語

3. 北海域ゲルマン語

アングロサクソン語 (英語の母体)

フリジア語

サクソン語 (後に低地ドイツ語として内陸ゲルマン語の一部となる)

4. 内陸ゲルマン語

低部フランク語 (オランダ語の母体)

中部フランク語

高部フランク語

バイエルン語

アレマン語

ランゴバルド語

} まとめて高地ドイツ語と呼ぶ。(後には中部フランク語も含まれる)

以下の説明ではゲルマン各語を次のように略称する。

ゴ=ゴート語, 古ア=古アイスランド語, 古英=古英語, 古高ド=古高ドイツ語, 中高ド=中高ドイツ語, 新高ド=新高ドイツ語, 古ス=古スウェーデン語, 古フ=古フリジア語, 古サ=古サクソン語, ノル=ノルウェー語

- 2) 参照 H. Kuhn, Schwarz, Goten, Nordgermanen, Angelsachsen. Anzeiger für Deutsches Altertum und Deutsche Literatur 66, 1952/53, S. 48.
- 3) 参照 E. G. Polomé, A West Germanic Reflex of the Verschärfung. Language 25, 1949,
- 4) R. Hachmann, Die Goten und Skandinavier. Berlin 1970.
- 5) 参照 A. Bach, Geschichte der deutschen Sprache. Heidelberg 1970, S. 81.

参 考 文 献

- S. Feist, Vergleichendes Wörterbuch der gotischen Sprache. Leiden 1939
 A. Heusler, Altisländisches Elementarbuch. Heidelberg 1964.
 F. Holthausen, Gotisches etymologisches Wörterbuch. Heidelberg 1934.
 C. H. Hutterer, Die germanischen Sprachen. Budapest 1975.
 H. Krahe / W. Meid, Germanische Sprachwissenschaft I, II. Berlin 1969
 W. Krause, Handbuch des Gotischen München 1968.
 W. Streitberg, Die gotische Bibel. Heidelberg 1965